様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０１７０

研究課題名（和文）浪曲三味線の「手」の史的形成過程に関する研究

研究課題名（英文）The Study of the Melodic Patterns of Roukyoku Shamisen from the Viewpoint of the Historical Change

研究代表者
北川　純子（KITAGAWA, Junko）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：００３７９３２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、明治期に誕生し、楽譜を介在させることなしに伝承が行なわれてきている浪曲の三味線演奏をめぐり、現時点で伝承され、また使用されている諸旋律型を整理した上で、史的変遷をふまえて演奏のありかたの展開を明らかにすることを目的とした。
研究の結果、第一に、現在伝承されている浪曲三味線の旋律型の種別は、浪曲の二大様式、すなわち「関東節」と「関西節」では異なっていること、第二に、20世紀初頭の録音にも見られる演奏様式の特徴を受け継ぎながら、時代の推移とともに、現在伝承されている諸旋律型が形成されたと考えられることが、導き出された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to explore the melodic patterns and the performance style of the shamisen in roukyoku, as handed down orally since the Meiji period without using any notation, from the viewpoint of the historical change.
The research showed, firstly, that the melodic patterns of the shamisen in roukyoku as currently handed down are different in the two major styles of roukyoku, i.e. "Kantou-bushi" and "Kansai-bushi", and secondly, on the basis of recordings available since the early 20th century, that the melodic patterns in use today seem to have developed gradually over the last 100 years.

研究分野：芸術学・芸術史・芸術一般

科研費の分科・細目：音楽学

キーワード：浪曲　三味線　「手」（旋律型）　関東節　関西節

１．研究開始当初の背景

(1)本研究以前には，浪曲の三味線演奏に関して，音楽学的な分析は全くと言っていいほど行なわれてこなかった。
(2)本研究以前には，浪曲が誕生して一世紀以上のあいだに，演奏様式がどのように変遷してきたかという観点からの研究は行なわれてこなかった。
(3)浪曲とその三味線演奏に譜面が使用されず，演奏が現場での即興性を有すること，また，個人個人によって演奏様式が少なからず異なることの二点は，(1)(2)を困難にしてきた要因だと考えられた。
　以上の状況をふまえ，記録という意味での採譜を行なった上で，様式の史的変遷をふまえた浪曲三味線の「手」(旋律型)の音楽学的研究を行おうと考えた。

２．研究の目的

　以下の三点を目的とした。
(1)現時点での浪曲三味線演奏で使われうる旋律型の基本形にあたるものを整理し，体系化すること。
(2)それぞれの旋律型について，史的展開のありようを探ること。
(3)(1)(2)を総合させ，浪曲の三味線演奏がどのような史的変遷を経てこんにちに至っているかの一端を明らかにすること。

３．研究の方法

(1)複数の曲師（浪曲三味線奏者）の師匠に旋律型を教授していただく稽古を重ねることにより，諸旋律型を習得した(フィールドワークに基づく諸旋律型の身体化)。
(2)諸旋律型を実際の舞台でどのように使用しうるのかについて，浪曲と三味線，両方の師匠方から聞き取りを行い，採取した旋律型をめぐる理論形成に反映させた(インフォーマルなインタビュー)。
(3)筆者自身が曲師として舞台でそれら諸旋律型を用いた演奏を行ない，事前・事後の浪曲師との会話から諸旋律型の可変性について考察し，その結果もふまえて諸旋律型を五線譜に起こした(採譜の形での客体化，記録)。
(4)浪曲が録音されるようになってからこんにちまでに録音された音盤の一部を対象とした音楽学的分析を行い，現在伝承されているような三味線の諸旋律型が浪曲揺籃期から一貫して使われてきたのかどうかについて考察した(分析；史的展開という観点を導入した上での理論化)。

４．研究成果

(1)本研究独自の用語とそれらを使用する理由について，以下に述べる。
①現在，浪曲の一席を構成する「部分」に関しては，それに対応する三味線の旋律型が存在しないと見なされているものと，存在すると見なされているものがあることが，フィールドワークから明らかになった。前者はたとえば「落とし」であり，後者は，「節」の各種別と「弾き出し」（前奏）である。セリフ部分の「啖呵」は，「節」よりもゆるやかであるが，陰の手として他の三味線音楽からの引用が使われる場合，詞章内容に応じた旋律型が使われる。本研究では，現在，それに対して対応する三味線の旋律型が存在すると見なされている「部分」，すなわち「節」の各種別，「弾き出し」，「啖呵」を［構造単位］と呼ぶこととした。この語を使うなら，浪曲三味線の伝承は，現在，［構造単位］ごとの旋律型を師匠が弟子に教授する形で実践されている。
②1900 年頃からの浪曲をめぐる先行文献でしばしば言及されてきた，「関西節」「関東節」という浪曲の二つの様式を，［地域様式］と呼ぶこととした。
③「関東節」の語には，様式を表す意味と，当該様式で使用される特定の「節」の種別を表す意味の両方がある。すなわち，［地域様式］を表す広義の意味と，［構造単位］を表す狭義の意味がある。広義の意味での「関東節」の演者は関西ではごく近年まで活動してこなかった事情もあり，浪曲関係者が使用する「関東節」の語は，どちらの語意で使用されているかが曖昧な場合が少なくない。①②の用語を用いることによって，この状況を多少なりとも整理できる。

(2)浪曲の三味線演奏に関して，伝承者から被伝承者に教授される［構造単位］ごとの旋律型の種別は，第一に「関西節」と「関東節」では異なり，第二に関西地域と関東地域では異なり，第三に，音楽的にみて同様の［構造単位］であっても関西地域と関東地域で呼称が異なる場合がある。主要な［構造単位］を表１に一覧として示す。

表１　対応する旋律型があるとして三味線が伝承されている［構造単位］の一覧

［地域様式］	［構造単位］の名称	伝承の地域と補足
関西節	「弾き出し」	関西・関東
	「キッカケ」	関東
	「地節」	関西 (自由リズムの節，関東と関西で呼称が異なる)
	「キザミ」	関西，一部関東
	「地節」	関東 (等価の拍に乗る節の基本形。関東と関西で呼称が異なる)
	「ウレイ節」	関西・関東 (等価の拍に乗る節の一種別。

		関東地域では半音の使用が特徴的だが，関西地域では必ずしもそうではない場合がある)
	「セメ」	関西・関東(詞章が旋律を形成することなしに拍に乗り語られる節)
	「早節」	関西・関東
	「ウレイ早節」	関東
	「浮かれ節」	関西・関東
	「バラシ」	関西・関東(関西では「大阪バラシ」のように，対応する三味線の旋律型があると見なされているものがある。関東では，一席の主として終盤で，詞章をたたみかけてゆく部分をさし，必ずしも特定の三味線の旋律型と対応はしない)
関東節	弾き出し	関東
	「キッカケ」	関東
	「(狭義の) 関東節」	関東
	「アイノコ」	関東
	「セメ」	関東
	「言葉ゼメ」	関東
関西節・関東節	啖呵	陰の手として使用する他の三味線音楽からの借用旋律型が関西，関東で伝承されている

これらの諸旋律型については，五線譜への採譜を行ない，楽譜ソフトを使用したデータ化を行なった。

(3)「赤垣源蔵」をテーマとする史的音盤を分析対象とし，使用されている三味線の旋律型を，現在伝承されている［構造単位］ごとの旋律型と比較考察した（※二代吉田奈良丸，※桃中軒雲右衛門，※二代東家楽遊，※一心亭辰雄，初代京山小円，初代宮川左近，桃中軒如雲，吉田奈良友，桃中軒新右衛門，東家楽燕，京山華千代，雲井式部，東家楽雲，※東家左楽遊，大洋州呑海，筑波雲，吉田天風，三代吉田奈良丸，※初代春日井梅鶯，初代京山小円嬢，二代天中軒雲月，吉田日の丸，三代京山小円，※酒井雲，※国本武春，※菊地まどか)。※を付したものについては一席全体（声および三味線）を採譜し，楽譜ソフトを使ってデータ化した。

分析結果の要点は，以下の通りである。

①浪曲が録音されるようになった早期から，浪曲三味線の演奏には，次の二点の特徴を見出すことができた。

①-1「節」を自由リズム(等価の拍に乗らないリズム)の節と，等価の拍に乗る節の二種に区分でき，両者では三味線演奏が異なる役割を果たしている点。具体的には，前者での三味線は，おもに声が織り成す節と節の合間に合いの手を入れ，後者では，声の背後で拍に乗る旋律型を奏するやりかたがとられる。

①-2 演奏過程において，特定の小旋律型を一席のなかでしばしば用いるというやりかたがとられる点。

②上記二点は，時代の推移とともに次のような展開を見せたと考えられた。

②-1 自由リズムの節と等価の拍に乗る節とで，三味線演奏が異なる役割を果たす，という特徴については，時代が進むにつれ，伸縮する拍による節での三味線は合いの手を入れることに徹し，等価の拍に乗る節での三味線は拍に乗せた旋律を声の背後で奏する，という，「節」のリズム上の性格の相違に対応した分化が徹底してゆく傾向がみられた。

②-2 特定の小旋律型を一席のなかでしばしば用いる点については，二つの［地域様式］，すなわち「関西節」と「関東節」では，異なる展開を見せてきたと考えられた。

「関西節」に関しては，1910 年代の雲右衛門や奈良丸の浪曲では，三味線奏者が独自の小旋律型を，伸縮する拍による節と等価の拍に乗る節の区別をほとんど行なわずに，一席全体を通して使いまわす，というやりかたが見られた。1920 年代に入ると，一方で，現在伝承されている「キザミ／地節」（等価の拍に乗る節の基本形）の三味線の「手」に含まれる小旋律型の使用が見られるようになるとともに，他方で自由リズムの節の合いの手に，現在伝承されている「地節／キッカケの【受け】」に含まれる小旋律型の使用が見られるようになった。

これに対して「［地域様式］としての関東節」の浪曲における等価の拍に乗る節では，ある程度定型的な複数の小旋律型を，変形もさせながら使用してゆくやりかたが 1910 年代から見られ，それらの小旋律型の中には，現在伝承されている

「[構造単位]としての関東節」と同様の小旋律型も含まれていた。

「関西節」の等価の拍に乗る節に関しては，いわば「基本形」にあたる「キザミ／地節」の旋律型がある程度確立され，奏者を超えて使用されるようになるのと並行して，特性の異なる［構造単位］にそれぞれ対応するような旋律型が形成される，という展開が見られた。形成は一気にではなく徐々に，また［構造単位］ごとに個別に，行なわれていったと考えられた。

（4）以上を総合すると，浪曲における三味線演奏は，浪曲が録音されるようになった早期からもたれていた二点の特徴，すなわち，一点目に，伸縮する拍による節と等価の拍に乗る節とで，三味線演奏が異なる役割を果たすという点，二点目に，演奏過程において，特定の小旋律型を頻用する点，を基底に置きながら，時代の推移のなかで変化し，こんにちに至っていると考えられた。変化の方向性は，第一に，異なる奏者間を横断して，ある程度共通した旋律型が使用される方向，第二に，[構造単位]ごとに異なる特性をもつような「手」が使用される方向である。

以上の研究成果は，第一に，浪曲において関係者により現在使われている各種用語を整理し，今後の研究のためのたたき台を作った点，第二に，浪曲三味線の各種旋律型を採譜・データ化して，今後の研究のための基礎資料を提供した点，第三に，明治以降に誕生し，口頭で伝えられてきた浪曲の様式変化という視点を差し出して，広く演奏様式の固定性と流動性の両方に着眼する研究に貢献しうる点で意義をもつ。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計８件）

北川純子　2014a「浪曲の啖呵における他の三味線音楽の旋律型の引用」大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門人文科学　62巻2号:15-28. 査読無. http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/27817/1/KJ1_6202_015.pdf

北川純子　2014b「浪曲の『節』をめぐる各種用語について」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター　第37回公開講座「浪曲の音楽性について考える」プログラム:20-23. 査読無.

北川純子　2013a「即興演奏の理論からみた浪曲三味線」大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門人文科学　62 巻 1 号:15-23. 査読無. http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/27661/1/KJ1_6201_015.pdf

北川純子　2013b「浪曲三味線の口頭伝承」大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門人文科学 61 巻 2 号:29-41. 査読無. https://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/27406/1/KJ1_6102_029.pdf

北川純子　2012a「浪花亭綾太郎《壷坂霊験記》の二種の録音の分析」大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門人文科学　61 巻 1 号:1-18. 査読無. https://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/27290/1/KJ1_6101_001.pdf

北川純子　2012b「浪曲の啖呵における三味線」大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門人文科学 60 巻 2 号:15-26. 査読無. http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/26846/1/KJ1_6002_015.pdf

北川純子　2011a「関東節の浪曲における三味線」大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門人文科学　60 巻 1 号:1-18. 査読無. https://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/26550/1/kj1_6001_001c.pdf

北川純子　2011b「浪曲三味線の即興性に関する予備的考察」大阪教育大学紀要　第Ⅰ部門人文科学　59 巻 2 号:27-43. 査読無. https://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/25442/1/KJ1_5902_027.pdf

〔学会発表〕（計１件）

北川純子　2013c「三味線演奏からみた浪曲」シンポジウム「浪花節―近代の語り物」東京工業大学，5 月 18 日.

〔図書〕（計１　件）

北川純子　2013c「浪曲三味線の研究」お茶の水女子大学博士論文. 本編 341 頁, 資料編 196 頁.

〔その他〕

CD〈名人竿忠／誉れの水馬〉(藤田元春口演, 北川純子曲師・解説，キングレコード，2013)

６．研究組織

(1)研究代表者

北川　純子（大阪教育大学・教育学部・教授）
研究者番号：00379322

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし